

(第3種郵便物認可)



### 日本財団「海と日本プロジェクト」とは

さまざまなかたちで日本人の暮らしを支え、ときに心の安らぎやワクワク、ひらめきを与えてくれる海。そんな海で進行している環境の悪化などの現状を、子供たちをはじめ全国の人たちが「自分ごと」としてとらえ、海を未来へ引き継ぐアクションの輪を広げていくため、日本財団の旗振りのもと、オールジャパンで推進するプロジェクトです。



広がる、豊かな海を未来へ引き継ぐアクションの輪

子どもたちの目に映った、

# 東京湾の過去と今と未来

東京の生活や経済を支える、東京湾。そこどれる海産物は、江戸前として人気を誇りますが、近年では子どもたちの「魚離れ」や「海離れ」が進んでいるといわれています。また、海洋汚染や水産資源の枯渇など海の問題も深刻化しています。そのため、日本財団では豊かな海を未来に引き継ぐことを目的に、全国各地で「海と日本プロジェクト」を推進。その一環として、昨年、東京湾において「子どもたちの海の体験機会を守るプロジェクト」が実施されました。4日間にわたり、合計31名の小・中学生が東京湾の今に迫りました。

## DAY1

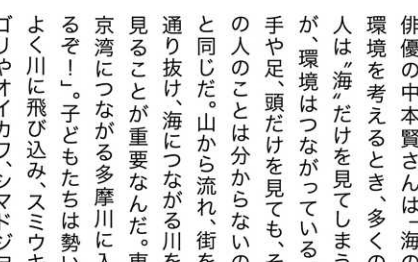
### 子どもたちの海の体験機会を守るプロジェクト



同日プロジェクトに参加した子どもたちは、「海の子ど」も報道局一少年少女海洋調査団」に任命され、昨年

同プロジェクトに参加した子どもたちは、「海の子ど」も報道局一少年少女海洋調査団」に任命され、昨年

8月19日、千葉県木更津市の漁港へ。東京湾に残る貴重な自然干潟で行われる伝統漁法「すだて(干潟に網を仕掛けて、引き潮時に



逃げ遅れた魚を捕まえる漁法」を体験取材しました。スズキやマアジ、コシヨウダイなど多くの魚を捕まえました。同行した東邦大

逃げ遅れた魚を捕まえる漁法」を体験取材しました。スズキやマアジ、コシヨウダイなど多くの魚を捕まえました。同行した東邦大

## DAY2

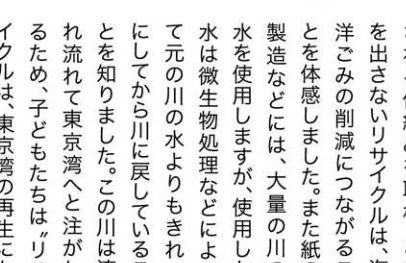
### 多摩川から見えた未来の東京湾



昨年8月20日、少年少女海洋調査団が訪れたのは東京湾ではなく、多摩川。なぜ、多摩川なのか？その疑問に多摩川をよなく愛する俳優の中本賢さんは「海の環境を考えると、多くの人は「海」だけを見てしまっ



1960年代の多摩川は水質汚染が進み、生き物がすめない川であったことが語られる。当時の大人たちが反省して、今の状態まで復活したんだ。70年代以降、公共下水道の整備や下水の高度処理化によって、今の多摩川があることを伝えました。



「この場所のように、他の場所でも干潟を造れますか？」と風呂田さんに積極的に質問する子ども。実際に体験



取り組んでいることを学び、「江戸前海苔すき」を体験。さらに船に乗り込み、東京湾に残る貴重な干潟のひとつ「三番瀬」に生息するアサリやバカガイ、シオフキガイなどの貝殻が風波や潮流によって運ばれてきた通称

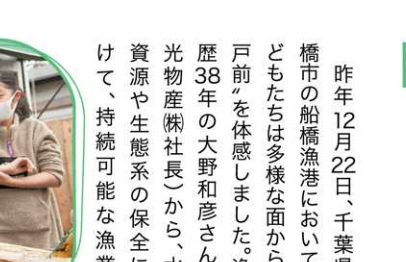
## DAY3

### 人の手によって守られる渚と資源



昨年8月23日に訪れたのは葛西臨海公園内にある「西なぎさ・東なぎさ」です。この渚について、風呂田さんは「これは人工の渚干潟です。人の手によって造られ、守られています」と説明。子どもたちは、その人工の渚で、小型の定置網やたも網を使って、マ

その後、調査団は日本製紙関東工場(埼玉県へ足を延ばし、古新聞や古雑誌古段ボールなどがリサイクルされる仕組みを取材。ごみを出さないリサイクルは、海洋ごみの削減につながることを実感しました。また紙の水を使用しますが、使用した水は微生物処理などによって元の川の水よりもきれいにしてから川に戻していることを知りました。この川は流れ流れて東京湾へと注がれるため、子どもたちは「リサイクルは、東京湾の再生にもつながる」ことに気づいたよう



「貝殻島」を発見します。「えっ、全部貝殻なの」と子どもたちは目を丸くし、この貝殻島がシラスやマアジ、カレイなどの稚魚たちの生息場所になっていることを知りました。

当日は、東京湾に関するクイズ大会や江戸前の海をテーマにして海の絵を描き、楽しみました。そこには、色鮮やかに多様な魚が泳ぎ回る海が広がります。それは、子どもたちが求める未来の東京湾の姿と重なります。

## DAY4

### 江戸前の魅力を全身で感じ、学び、描いた「未来の海」



詳細は [東京すくすく 海と日本プロジェクト](#) 検索

